

【行動目標】

資源を地域内で循環する地産地消をすすめよう

地域の産業や特色を活かすなど地域ぐるみの資源循環の取組や、地域のバイオマスやエネルギー資源を利用したまちづくりを進めましょう。

本道は、風力、雪氷やバイオマスなど、再生可能なエネルギー資源に恵まれており、持続可能な社会を築きあげていく大きな可能性を秘めています。

地域の特色や地域の産業などに着目し、地域の住民、企業、民間団体、行政機関などが連携・協働して、資源循環の取組やバイオマス、再生可能エネルギー資源の利活用などに取り組むことにより、地域ぐるみでの継続的な環境保全活動の展開や環境に配慮したまちづくりを目指します。

【道内での主な取組事例】

道内には、道民、事業者、民間団体、行政機関等の各主体が連携・協働して、地域で環境保全活動に取り組んでいる事例が数多くあります。ここでは、その中から、事例をいくつか紹介します。

3Rの推進

【ごみ減量実践活動ネットワーク】(石狩)

札幌市では、市民、事業者、行政が一体となって市民の日常生活や企業の事業活動におけるごみの発生・排出抑制、再利用、リサイクル等のごみ減量につながる具体的な活動を展開することを目的に、平成17年に「さっぽろスリムネット」を設立。生ごみ減量、紙ごみ減量、容器包装減量、リユース実践、普及啓発の5つのプロジェクトを設置し、生ごみ堆肥化モデル実験、古紙回収ボックスの配置、街頭啓発アンケート、リユース広場の開催などを行っている。

食品系廃棄物のリサイクル

【生ごみの堆肥化】(石狩)

札幌市のモデル事業である「定山溪地区生ごみ堆肥化モデル事業」として平成18年にスタート。定山溪観光協会、定山溪温泉旅館組合、定山溪連合町内会及び札幌市で実行委員会を組織し、農協や農家などとの連携のもと、定山溪地区のホテル等から排出される生ごみを石狩市の生ごみ堆肥化施設で堆肥化して農家に提供、収穫した野菜を定山溪地区のホテルの食材として観光客に提供したり、地域の特産品として販売。現在、モデル事業の期間は終わったが、取組は継続されている。

【学校給食フードリサイクル】(石狩)

札幌市が子どもたちの食育・環境教育推進のために平成18年度から開始した学校給食フードリサイクルを、モデル校となった2校が実施した。学校給食の際に出た野菜の切りくずや給食の残さを分別・回収し、生ごみリサイクルセンターで堆肥化。堆肥は農家に運ばれ、栽培された野菜は再び学校給食の材料として使用される。また、堆肥は学校の教材園等でも使用され、子どもたちが野菜の栽培と調理を体験する。

【廃食用油の再資源化】(網走)

市民の有志が設立した会社が、市内の飲食店やホテルから廃食用油を回収し、バイオデ

ディーゼル燃料を精製。精製したバイオディーゼル燃料は特別医療法人の送迎車や、ごみ収集車、市の公用車で使用されている。また、バイオディーゼル燃料製造過程で発生する廃グリセリンを処理するため、専用の燃料ボイラーを開発した。

【サケ加工残さの有効利用】(網走)

斜里町では、第1次産業を活性化させるために農業協同組合と漁業協働組合が連携し、「食海土shari企画協議会」を平成7年に設立。斜里町で最も多く生産され、かつ再利用ができず資源になりにくい、水産加工場から廃棄される秋サケの残さに着目し、酵素を使用しない「100%天然素材の斜里町特産魚醤」を開発。ゼロエミッションと地域の活性化を進めている。

資源回収・リサイクル

【高齢者を中心とした資源リサイクル】(檜山)

奥尻町高齢者事業団は、容器包装リサイクル法の本格施行の6年前である平成3年の設立以来、空き缶等の資源ごみの収集、分別、減容の活動を実施している。本事業団の地道な活動により、町民全体の環境保全意識が格段に向上し、ポイ捨てされた空き缶など不法投棄された廃棄物の姿が目に見えて少なくなった。他方、本事業団の活動が高く評価されることが、そこで働く高齢者の生きがい増進となり、さらにリサイクル活動を活性化させるという善の循環が形成されつつある。

【資源集団回収】(十勝)

本別町では、自治会などの団体がまとまって、家庭から出る資源ごみを集める「資源集団回収事業」を行っている。対象となる資源ごみは、金属類、缶類、紙パック、ダンボール、新聞紙、雑誌類、びん類で、回収後は回収業者へ引き渡す。各自治会では、資源ごみをいつでも保管できるストックヤードを設けており、決められた曜日に、回収業者と共に収集を行う。このような取り組みにより、本別町のリサイクル率全道1位となった(平成16年度)。

バイオマスの利活用

【バイオマスネットワークの形成】(石狩)

生ごみを中心としたバイオマスの有効活用の方策を探るとともに、新エネルギーの利用や新産業を創出することを目指し、排出者や関係事業者等で構成する「石狩バイオマスネットワーク研究会」を平成17年に設立。

調査研究活動により家庭用廃食用油の回収事業が開始され、この取り組みを石狩管内に拡大するため、「いしかりエコ燃料プロジェクト」を発足させた。また、食品加工残さを利用したバイオマス事業の可能性調査なども進められている。

雪氷冷熱エネルギーの利用

【雪利用技術の研究・開発と雪利用普及】(空知)

産・学・官が協働して具体的な産業おこしに向けた研究活動を行うため、「美唄自然エネルギー研究会」を平成9年に設立。美唄市は、「美唄自然エネルギー研究会」と連携し、豪雪寒冷地域の固有な資源である雪の冷熱エネルギーの利用研究と多様な分野における技術開発・事業化を図っている。

具体化された事例には、賃貸マンション、老人福祉施設等への雪冷房システム導入や、米穀雪零温貯蔵施設など農業施設への雪の冷熱エネルギー導入などがある。その他、地産地消の取組である氷室を活用した「美唄雪蔵手前みそ仕込み」や、雪山イルミネーション、旭山動物園への雪プレゼントなども行っている。

【雪と共生するまちづくり】(空知)

沼田町では、雪と共生するまちづくりを目指して、「輝け雪のまち宣言」を平成14年に宣言した。平成8年、雪の冷熱エネルギーを活用して米を貯蔵する施設「スノークールライスファクトリー」を建設。そのほか、公共施設への雪冷房導入や、雪冷熱を活用した農作物栽培の実験等を進めている。また、学校教育の中にも沼田町独自に「利雪学習」を採り入れている。

雪利用の取り組みは町民にも広まり、雪中貯蔵した米、酒、みそなどの生産・販売や、農家では雪冷熱を活用した花きの栽培なども行なわれている。

風力発電

【市民風車による風力発電】

NPO法人北海道グリーンファンドが、月々の電気料金に5%を加算し、その5%分を市民による共同発電所建設のために運用(グリーン電気料金制度)している。2001年、総事業費の約8割を市民出資により賄い、日本で最初の市民風車「はまかぜ」ちゃんが浜頓別町で運転を開始。2005年には、石狩市で「かぜるちゃん」と「かんりんぷう」が運転を開始したほか、2007年12月にも新たな市民風車が石狩市で運転を開始している。

「流氷の保護」をキーワードとした環境保全活動

【オホーツク流氷トラスト運動】(網走)

地球温暖化の影響を強く受けるオホーツク地域が地球温暖化防止の警鐘を鳴らし、「流氷の保護」をキーワードに地域がひとつになって取り組む環境運動「オホーツク流氷トラスト運動」を展開。「オホーツク流氷の日」の制定や、観光事業者が連携し、環境に配慮した受入体制を整備する「旅エコプロジェクト」などを実施している。

この運動を通じて、地球温暖化防止をはじめとする環境保全活動を広く展開するとともに、取組を積極的にPRすることにより「環境先進地オホーツク」というクリーンなイメージを形成し、観光、農林水産物等のイメージアップを図り、地域の活性化を進めている。